

空

平成29年4月30日発行

第15巻2号

通巻第72号

空



2017・4・5

**SORA** 72号

# 噴煙

柴田佐知子

噴煙の見ゆる粗き田打ちにけり

北窓を明きしばらく北を見る

噴煙の高々上がる裾を焼く

棒振つて走る男を山火追ふ

春霞まとひし山の重くなる

黄塵へ癩強き馬引きだせり

春の鳥外輪山を出入りせり

連なれる嶺の限りを春霞

噴煙にしばし紛るる春の雲

田搔きせぬ牛馬ばかりや草千里

苗木市雨は光の筋となり

大鯉についてゆきたる花筏

鷹鳩と化して都会を楽しめり

買つてすぐかむつて歩む春帽子

付けられし鈴気に入らぬ子猫かな

客がすぐ茶の間に移り夕長し

福岡 高倉 和子

東京 中田みなみ

山裾にかたまる家や冬の星

寒紅を引くや犬知るお留守番

黒髪の芯まで強き雪女

薄氷の寄りては離れ選挙戦

失ひしあとの寒さと思ひけり

縁先に一とまづ置きし寒卵

庭石に日の斑の揺るる二月かな

裏戸より女小走る囿ひ葱

てのひらに受くる間もなき春の雪

雛仰ぐ酢の香残りし掌を重ね

猫の仔の顔を濡らして水を飲む

さくら紙のせて雛の瞳と別れ

息かけて雛のほこり払ひけり

啄木忌鱒一と皿売れ残り

春光の玉と転がる水の上

新宿の灯に溺れゆく鱒下げ

長崎 荒井千佐代

埼玉 服部早苗

潮差して運河うねりぬ涅槃雪

第九の余韻濃紺の冬の川

海光に目つむる猫や花大根

風花やわが散骨も一手段

さへづりや昼を点せる木の駅舎

さえざえと乾漆にひび阿修羅像

シスターが神父を恋へりさくらばな

文音に星の切手を貼る七日

子の眠る部屋の天井ゴム風船

成人の日の華やぎとすれちがふ

ビル置きしごとくに巨船花の昼

初観音拝して電気ブランかな

食卓に書を読む日々や花杏

病みぬいて逝きし二月や夫の空

人力車止むや柳絮に囲まるる

吸ふ息のふかく沈丁の香の深く

福岡 柴田志津子

歌がるた目くばせをもて子に取らす

梟の鳴く夜は早寝せかさるる

鶏のつつきしあとの齋摘む

起つ座るそしてつぶやく春炬燵

海苔小屋のひとつ残りし岬かな

漁捨てし路地に燕の来りけり

春満月見よと誘はれ男下駄

大桶に水たつぷりと桃の花

福岡 岸 洋子

浄め塩ほどの初雪なりしかな

鬼夜果てオリオンの空下りてくる

匂はざるほどのふくらみ寒紅梅

後衿直し年賀に送り出す

白梅も父の忌も鋭き風のころ

掬はるる寒の大鯉身を振り

売るも買ふも屈む古書市冬ぬくし

梅もどき錠剤こぼさぬやうに飲む

北九州 深川 淑枝

兵庫 戸栗 末廣

初宮やまだ闇残る波の音

鳶の輪の真下ぬくとき龍太の忌

初神楽ときどき混じる鳶の笛

牡丹鍋あやしき酔ひのきつつあり

田遊びの終りは藁の蛇を斬る

城址に春が来てゐる鳶の笛

樞落とす音夕凍みの観音堂

金縷梅に日の当つたり戻つたり

狐火の立つたび村の滅びゆく

真つ青な空に張りつきいかのぼり

堰落つる水のたてがみ寒に入る

立春や肥やし袋のゆるびたる

依代の岩の湿りや百千鳥

水温む鼈が覗く農具小屋

放つ矢の鷹の羽音や春の雪

しづけさと昏さのこもる椿山

福岡 角野良生

寒垢離を拝すいつしか起立して

真言も呻きとなりぬ寒行者

寒垢離のいま法悦に入りしかな

寒垢離のいつしか生身失せてをり

よろけつつ滝を離るる寒行者

大宰府 山本則男

回廊のかたちに礎石青き踏む

風が火を火が風を追ふ野焼かな

さへづりや石の耳持つ石佛

一斉に立つ音残し卒業す

暗がりに馬の匂ひや春祭

糸島 小林朱夏

手拭を首に頭に浜焚火

釣り人も竿も動かず目借時

赤糸を爪に絡ませ竜天に

灘風に天地失ふ鯉幟

一駅の電車通学麦の秋

熊本 松田明子

頂上に石棺ありて初詣

気嵐の湖上をすべりゆく朝

留守電に残りしままの火事見舞

風に舞ひ風に運ばれ野火埃

勢子として千里自在に野焼の日

福岡 亀井 紀子

初湯してこの世の広さ思ひけり

水鳥の一羽離るる流れかな

高層となりゆく町よ寒鴉

病床の父が指差す寒雀

一人づつ紙抜け出でし雛かな

糸田 宮井 知英

春隣生くる手立ての血を貰ふ

照射室の鉄扉は厚し春寒し

梅ひらく方へ寢床を引き寄する

決心は夢を見てより牡丹の芽

山羊曳いて母が出て行く霞かな

京都 天谷 翔子

あはうみに常の鳥ゐる初御空

百歳の葬り祝のごとく雪

うすらひをつつきわたしも毀れもの

ふくろふの三頭身でありにけり

下萌や風も日差もうすみどり

粕屋 吉田 葎

弁当の上は桜のご神木

雛流すお城を少し傾けて

耕転機曲るところで鳥曲る

鋭角に鞆轆をこぐ喧嘩のあと

ゆすらうめあふれ出すまで言葉待つ

千葉 原 友 子

裏山の榊切りくる冬日和  
笛鳴や濡れてにほへる竹柄杓  
冬耕の背に完熟の日向あり  
臘梅を揚げばははの世が近し  
囀や土偶の腰はみな豊か

宮崎 田 代 民 子

内裏雛そびらの金屏まぶしからむ  
はしけやし雛の調度の箱枕  
かぐや姫めく竹筒に在す雛は  
ほほづきを雪洞として峽の雛  
老いの雛ごと掛物をかへしのみ

大阪 田 岡 千 章

屠蘇交すあんさん頼りにしてまつせ  
二日はやケトルが笛を吹きみたる  
初風呂に融け南無阿弥陀なむあみだ  
あら静か転た寝妻の三日かな  
本籍を二丁目麴麴屋に寒雀

福岡 永淵恵子

自画像の子規と見てゐる枯糸瓜  
春兆す子規の小庭をひとまはり  
春愁は子規の机に座してより  
子規ほどの食欲はなし草の餅  
子規庵の鶏頭の種蒔きにけり

大野城 森田 明成

紅梅のみなぎる蕾空青し

東京は相席おほし春ごろも

押し出せば見分けつかざる入園児

蜆汁曜日进行分かず暮しをり

春の月車窓に躍り出でしかな

福岡 白水 良子

初恋の人も老人賀状来る

背伸びして定位置に掛く初暦

少年の座して角ばる御慶かな

聖母像赤き茨の芽を映す

鬼描けば吾が顔になり豆を撒く

粕屋 秋千 晴

呉服屋の陳列窓に享保雛

赤き紐解いては結ぶ雛の膳

春宵や皆居眠りの観光バス

つり銭に餅粉の付きし入彼岸

草餅や女ばかりが笑ひをり

福岡 あさなが捷

同じ唄歌ひて父の花見酒

囀や子の靴すぐに小さくなり

点滴の袋に映る楠若葉

合言葉かけ合つてゐる蟻二匹

しつぽまで風をほらみし鯉幟

長崎 松尾龍之介

寒鯉のまとふ幾重の水衣

探梅や棹一本の舟さばき

春近づく指揮者が楽譜めくるたび

擦り硝子よぎれる白は春の猫

春の水ちりめん皺をつくる風

北九州 河原敬子

飾買ふ袋突き抜く鶴の嘴

庭に佇ち初日の雫全身に

月と星は相思の距離やお元日

蝶貝に柔紙を当て屠蘇器しまふ

人日や城下の屋根の照り合ひて

直方 曾根富久恵

遠目にも頂の岩大旦那

鏡餅やや前傾に納まりぬ

病む母におどけてみするお正月

晴れ晴れと河口の町へ初仕事

ほろ酔ひの夫が正面小正月

福岡 栗原京子

にぎやかな宴の奥に牡蠣を剥く

買ひ手なき犬の甘噛み冬日向

マフラーや正午の路地に弁当屋

ほほゑみを家訓に加へお元日

雄鶏の一声雪の山を突く

岡垣 田中とし江

太宰府 西住三恵子

臘梅や独鈷杵胸に修行僧

里宮の深き庇や暖かし

乾坤へ野焼の敬や触れ太鼓

蒨葎草真青にゆでて母とあり

羊群原焼きあらはなる周防灘

始まりし水の笑ひや春の川

街道の水かげろふや鳥帰る

おきあげの虫喰ひゆかし雛の壇

東京のホームは長し新社員

紅梅や姉の小さな炊飯器

福岡 山内 碧

兵庫 青木 朋子

大根引く鏝を深むる一輪車

木の陰に群れざる鴨や夕明り

突かれて逃げ腰に得し寒卵

膝に猫眠らせ夜のシヨール編む

薄氷大事に剥がし後知らず

孤の鴨の斃れてをりぬ今朝の雪

俎板を這ふ飯蛸へ手のつかず

小さき木の震へて雪を落しけり

奥つ城や鶯の声響かせて

鴨の群しづか一羽を失ひて